

ファイナルファンタジークリスタルクロニクル～悲恋～

雪高

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

F FCCのあるイベントを独自で勝手に小説化しました  
気分を害す人は読まない方が良いと思いますw

目 次

- |     |            |
|-----|------------|
| 第1話 | 「ボロボロの手紙」  |
| 第2話 | 「失踪」       |
| 第3話 | 「まあたらしい手紙」 |
| 最終話 | 「えいえん」     |

17 14 8 1

# 第1話 「ボロボロの手紙」

ファイナルファンタジークリスタルクロニクル～慈恋～

朝の日差しが部屋に差し、またミルラの雫を集める「クリスタルキャラバン」として、

ティパの村から旅立つ日がやつてきた。

「おーい、エリン。行こうぜー」

遠くでセルキー族で同じクリスタルキャラバンの仲間 ム・ジカが、私を呼ぶ声が聞こえた。

「月日は短くもありませんが長くもありません。エリン、早くしてくださいね」

ム・ジカの隣にいるユーフ族のキャラバン仲間 シーベークが続けて言つた。

早くミルラの木をみたいせいか。うずうずとしている。

「1年間なんてあつと言う間よ。もう少し、ゆっくりさせておきなよ」ム・ジカとシーベークの真ん中で腕を組みながら怒っているのは、リルティ族のクレア＝ギルタ。

私にあわせてくれているのか。2人はせつかちすぎると、説教をしているようだつた。

「ごめん。もう大丈夫だから。さあ！出発しよう！」

3人を待たせてしまつた事を謝り、私達はティパの村から旅立つていく。

ミルラの雫を集めに。

クリスタルキャラバンとは？

私達の世界は数百年前より、瘴気と呼ばれる謎の氣に支配されており、瘴気に触れるとたちまち体力を奪われてしまう。

私達を守ってくれるのは、各村・街・施設にあつたクリスタルのみ。しかしクリスタルの効力はたつたの1年のみ。

その為私達はミルラの木と呼ばれる不思議な木から雫を集めて、ク

リスターの力を強化しないといけない。

それが私達、クリスタークリラバーンである。

私達は小型のクリスターを祀ったゲージを抱えて、旅をしなければならない。

クリスタークリラバーンは各町や村に2人1組、あるいは4人で1組で活動している事が多く、各自の使命を抱えて活動している。

非常に責任重大な仕事なのだが、中にはのんびりと行動しているキヤラバンも多い。

私のように。

「エリン。旅と違うんだからな？そこら辺のところはよく考えてくれよ」

ム・ジカは前にもこの話をした事がある。私がそんなにのんびりしているのだろうか。

「それは行つても、ミルラの木がなくなるわけないでしょ？だつたらのんびり行つても良いじゃない。」

私は滅多になれないクリスタークリラバーンの旅を楽しみたい。そう思つて言つたのだが、馬車を引いていたシーベークがこちらを見ながらため息を出した。

「エリン。貴方時間が無限にあると思つてているのですか？」

「え…だつてそういうじゃないの？」

やれやれと言わんばかりに、ム・ジカも頭を抱えている。

「エリン。ティダの村の事を忘れたわけじゃないでしよう。私達も彼らのような悲劇を出さないように、早急に行動してなくてはいけないのですよ」

シーベークは少し尖つた言い方で説明した。

ティダの村と言うのは城下町から近くにある村の事だ。

しかしもうそこには村人はいない。今はただのモンスターの住処となつていて。

「ティダの村か…」

2人に説教されて、私もようやく思い出す。ティダの村の事について。

ティイダの村はその昔、クリスタルキャラバンが何らかの理由によつて、帰還しなかつた村もある。

クリスタルが輝きを失い、瘴気に冒された人々はたちまち生氣を失つていつた。

次第にティイダは死の村となり、残つた人々は屍となつて見つかつたらしい。

そう。クリスタルキャラバンは絶対に失敗してはいけない。

失敗すれば最後、私達の村も死の場所へと変貌してしまう。

「ごめん。今度からは私も気をつけるね」

「わかれば良いんだよ。俺達の母さんや父さんも期待しているからな」

ム・ジカがそう言うと、槍の手入れをしていたクレアが思い出したかのように、話題をふつた。

「そう言えばさ。皆聞いた事ある？ ティイダの村に生き残りがいたんだって」

クレアがそう言うと、シーベークは呆れた口調で反論する。

「生き残り？ クレア。あそこは死の場所となつた村ですよ？ どうやって生き残れる保証があるのですか？」

「私も詳しく述べ知らないけど、なんだかそこにいたクラヴァットの女人が、別の村で村長になつていてる…とかつて聞いた事あるよ」

そんな話を聞いた事があつた事を私は思い出した。

それはクリスタルキャラバンになつた日に、偶然ティイパの村の近くにいた城下町のクリスタルキャラバンのリーダーでもある。

リルティ族のソール＝ラクトさんの噂話の1つとして語つていた。

「それつて、ソールさんが言つていた…？」

「うん。そうみたい。城下町に行つた時、それらしい噂話ををしている人が何人もいたの」

「なら生きていたら、当然おばあさんぐらいか…」

ム・ジカは思い出したかのよう、呟いていた。

「なあ。そう言えば、前に行つたセルキーの村でクラヴァットっぽい村長がいなかつたか？」

以前私達が旅の途中に出向いたセルキー族だけの村 ルダの村。  
そこでは私以上にマイペースなクリスタルキヤラバンの人達がいて、偶然一緒になつて、折角なのでと言う事でルダの村に招待された事を思い出した。

「確かにあの時見たおばあちゃんつて…クラヴァットに似ていたね」  
クラヴァットの私も少し気になつていた。

とてもじやないが彼女はセルキーには見えない。

セルキーとクラヴァットの容姿を見間違える事は多いが、どことなくセルキーらしいところが全くない。

ル・ティパは不思議な人物としても有名でもあり、ルダの村で村長として生活していた以前の痕跡が全くないのだ。

まるでどこからか、逃げてきたようだと言わわれている。

「噂だとあのおばあさんが、ティダの村の生き残りとか…」

クレアが続けて言おうとした時。シーベークが答えた。

「全く…何を言い出すのやら…。セルキーの長として、そう言う風に見せて いるだけでしょう。セルキーは何かと因縁がつけられますからね」

シーベークは私達の話をただの噂話だと思い、強引に私達の話を切り上げるように、馬車を進めた。

ティダの村は正直苦手に近い。ミルラの零がなければ通る事もないだろう。

あの場所を通ると、私達の村がティダと同じようになる事を想像してしまふからだ。

勿論気をつけていれば、そんな心配はしなくてすむ。

しかし私にはもう1つ気がかりな事があつた。

「あなたは もう かえつてこないの？ きっと かえつて くるわ よね？」

だから この手紙を こかげに たくします。わたしの あいと  
ともに」

小声で呟いたが、近くにいたム・ジカには聞こえてしまつたようだつた。

「なんだそれ？」

私はティダの村のある木の近くで、ボロボロの手紙を見つけ、それをまだ持っていた。

何となくだが、手放す事は出来なかつたからだ。

ム・ジカが興味本位で見ていたので、手紙の内容も一緒に説明した。

「へー。クリスタルキャラバンにあてた手紙かな？」

とム・ジカ。

「エリン。それイタズラで誰か置いたと言ふ事は？」  
シーベークも気になつたのか。話に入ってきた。

「ティダの村へ行けるのはクリスタルゲージを持つているキャラバンだけよ？そんなどこにこんな手紙置くと思う？」

言われてみれば。と呟き、シーベークは頷いている。

彼自身、この噂話を否定したいところがあるのだろう。

自然を愛する彼は、非現実的な事は認めたくないところもあるのだろう。

「これつて誰かへのラブレターミたいなものかしらね。でもやつぱり年月が経つているのかしら」

とクレアが手紙を興味本位で見ながら言つた。

「実はね。この手紙、昔、マール峠の村長さんにも見せた事があるの。正確に言えば見られただけど…」

マール峠は城下町に行くために通る村の1つ。

そこには少々スケベなおじいさんがいて、彼の孫娘さんはいつも呆れてるかのように説教をしていた。

ティダの村へミルラの秉が取りに行つた日。

ゲージも一杯になり荷物も一緒に整理しようと、マール峠へ立ち寄つた事がある。

私はいつも村長さんに捕まつてしまふ事があり、どうしようかと悩んでいた時に拾つた手紙を落としてしまつた。

その時いつものように、村長のセシルさんが私に近づいてきたが少し様子が変だつた事を覚えていた。

「…、この手紙は？あんたが書いた…のかい？それとも…」

私は困惑したが村長のセシルさんの問いに、ティダの村にあつたものでしたと答え、村長のセシルさんは拾つてくれた手紙をそつと渡してくれた。

「その時の顔…なんだか寂しいような、嬉しいような…。不思議な顔をしていたの」

「まさか、あのじいさん。ティダの村の生存者なのか？」

ム・ジカは、あり得ないだろ、と言わんばかりに笑いながら言つた。  
「私もセシルさんの事は何度か存じておりますが、ティダの村にいたと言う話は聞いた事ありませんね」

シーベークは何度か孫娘さんとも会話した事があるらしく、その時に村長さんの事も聞いた事があるらしい。

やはり昔からマール峠で生活していたと言う事だったようだ。  
「そうなの？私、ルツツさんから聞いた話があるんだけどね。セシルさんつてマール峠で村長として生活する以前の痕跡がないんですね」

て

クレアはシーベークの意見をきるように続けた。

どことなく今の話はルダの村の村長 ル・ティパに似ている気がした。  
「で、その手紙。ルダの村の村長さんにも見せたのか？」  
「うん。ルダの村に泊まつた日に、夜中読んでいた時に後ろから見られた」

ル・ティパにも見せた事があり、マール峠の村長 セシルさんと同じような反応をされた事も、今になつて思い出した。

「うーん…今の話を聞くと、セシルさんかティパさんが手紙を書いた…にしか聞こえないわね」

クレアは頭を抱えながら推理していた。

しかしシーベークは、先ほどと同じく呆れるように、

「またまた…。きっと何かの手紙と勘違いしたんでしょう。さあ。次のミルラの雲が取れる場所まで来ましたよ」と言つた。

ム・ジカは真っ先に降りて「よつしゃー」とやる気を出す声をあげ

ていた。

クレアも「さあ。行こう」と私の肩をポンと叩き、ム・ジカの後を追つていくのが見えた。

しかし私は、この手紙の事がどうにも気になつてしようがない。「…気のせいじゃないのかも…本当にティイダに関係するんじゃないのかな…」

この時の私はそう思うしかなかつた…。

この私の行動が最悪な事態を招く事になるなんて…思いもしなかつた…。

## 第2話 「失踪」

馬車をひく音が聞こえる。

馬車の中には私と、ム・ジカ、クレアがいる。  
シーベークはいつものように馬車をひく係だ。

「ふう。なんとか今年も溜まつたな」

ム・ジカが重そうなクリスタルゲージを抱えて言った。

ティダの村の話をしてからの数日後。

今年は幾度となく好調であり、すぐに溜める事が出来た。

「これで帰つたらしばらくは旅もお休みね」

クレアは伸びながら言つた。

これで1年間は安心だと思うと、一気に疲れが出た。

「私はもう少し、旅を続けたかったです。色々な場所の観測した  
かつたです」

「おいおい…。エリンの時に説教していたシーベークが何言つてんだ  
よ」

ム・ジカがそう言うとシーベークは「忘れてました」と冗談をいれ  
ながら答え、

ム・ジカ、クレア達はゲラゲラと笑つていた。

この楽しい時間がいつまでも続けばいいのに。私はいつもそういう思  
う。

瘴気を無くす方法を全種族の人々、全街・村の人々が考えており、未  
だその謎を明かされていない。

結局のところ、何年も瘴気に冒されるこの世界の理に従つて、私達  
はまた終わらない旅を続けるといけないのだ。

勿論旅は危険な事だらけ：いつティダの村のようになつてしまつ  
のかと思うと、私は怖いと思う事が何度かある。

「大丈夫よ、エリン。そんなに怖がらないで。モンスターも強い奴ば  
かりじやないし、物騒な所は行かなればいいだけよ？」

浮かない顔をしていたのか。クレアが察するように私を肩をポン  
と叩きながら言つた。

「うん…それはわかっているんだけど…」

私はどうにも気がかりな事があつた。

それは数日前にティダの村について語つた時。

あのボロボロの手紙を話した時からである。

あの時からセシルやル・ティパさんの事が気になつて仕方がなかつたからだ。

「やつぱり、気になつてんのか？マール峠のー」

「セシルさん？」

クレアとム・ジカが続けて言つた後に、私は「うん」と小さくつぶやき頷いた。

マール峠の村長であるセシルさんが、数日前から行方不明になつていた。

妙な事に私が落としたボロボロの手紙を読んだ後から、少し様子がおかしかつたららしい。

「孫娘さんにも聞きましたが、まだ見つかっていないようですね…」

シーベークも気になつていたようだつた。

「しかし見つかっていないだけで、どこかにいると思いますよ。瘴氣の中でどこにも行けないでしよう」

確かにそうだ。

私達にとつて瘴気は毒だ。

そんな中、どこかに出かけるなんて、自殺をするようなものだ。

「結局ティダの村の事も噂ですからね。エリン？気にしないように」

私がこの間からこの事について責任を感じているのをわかつていだのか。

シーベークは私を慰めるように、優しく言つた。

「うん、ありがと。大丈夫だから」

しかし…本当に噂なんだろうか。私はそんな事ばかり思つていた。

アルフィタリア城下町の近くを通ろうとしたその時だつた。

城下町の近くには、数日前やついさつき話題になつたティダの村がある。

その近くで、なにやら騒いでいる人がいた。

シーベークはその騒ぎに気づき、急いで馬車をとめた。

「ただ事ではないですね…」

シーベークがそう言うと、騒いでる方を見た。

そこにはなんと、マール峠のクリスタルキャラバンの他。セシルさんの孫娘さんや、ルダの村のクリスタルキャラバン達が集まっていた。

「シーベーク…」

私は嫌な予感がした。気持ちを察してくれたのか。彼らの近くにまで馬車を進めてくれた。

「でも、ここで見たと聞いたんです」

「しかしながら、ここは何もないはずだぞ」

「私達もおかしらがここにいたって噂を聞いたんだ！」

「おい。ゲージを持っているから、この子を連れてつても大丈夫だろ。何でダメなんだよ」

「いや、民間の人を巻き込むわけには」

マール峠のリルティ族のクリスタルキャラバン ロルフ＝ウッドさん。

城下町のリルティ族のクリスタルキャラバン ソール＝ラクトさん。

ルダの村のセルキー族のクリスタルキャラバン ハナ・コールさんとダ・イースさん。

そして、マール峠のセシルさんの孫娘 クラヴァットのラシェさん。

それぞれ囮うように集まつており、何やら言い争いのように騒いでいた。

「どうしたんですか？」

私は真っ先に降りて、ソールさんに事情を聞いた。

「おお。エリン殿。それにティパの村の皆さん！」

ソールさんは敬礼をした後、かしこまるように言つた。

「実はこちらのラシェ殿が、マール峠の長であるセシル殿を見たと言つておられるのです」

「え…？」

私は少々困惑したが、ラシェさんが続けた。

「数日前におじいちゃんがいなくなつた事は知っていますよね？しばらくして、峠に来たキヤラバンの人達が言つたんです。ティダの村に入つて行つたって」

シーベークやクレア、ム・ジカ達もその話聞いて真っ青になつていた。

「おい、何かの冗談じやねえのか？」

「冗談でこんな事言いません！」

ラシェさんはム・ジカを怒鳴りながら言つた。

「実はな。セシルさんを見かけた話は俺らも聞いた事があるんだよ」

ロルフさんがラシェさんをおさえるように言つた。

「なんでも数日前にここに来たと言つている奴が何人もいてな。それで俺達が調べようとしているんだが…」

「ハナ・コールさん達もここにいた、と言うわけですね？」

しかめ面のハナ・コールさんを見ながら、私は言つた。

「そうよ。でも私達がここに来たのは、おかしらがここにいるからつて聞いたから」

おかしらと言うのは、ル・ティパさんの事だ。

彼女達ルダの村の人は、ティパさんの事をおかしらと呼んでいる。

「おかしらが知らない間にキヤラバンの馬車に乗つて、ここにきたつて話を聞いたからね。俺達も心配でここにきたんだ」

ダ・イースさんがいつになく、不安な顔をしていた。

いつもは陽気に話しかける彼も、さすがに困惑していたようだつた。

「そしたら、ソールさんが頑固でね。通してくれないんだ」

ダ・イースさんは意地が悪そうに言つた。

「民間の方をここに入れるわけには行かないんだ。ロルフ殿。ラシェ殿を連れて早急に帰還してほしい」

「それは言つても、クリスタルキヤラバンの俺達が入れば安全だと思ふんだが…」

ソールさんとロルフさんはラシエさんが中に入れて欲しいと何度も頼んでいるのを見て、どうするかと言い争いをしていました。

「おじいちゃん、このままだと大変な事になりそうで怖いんです！…

昔、ここで…」

ラシエさんが何かを言いかけた。私は心が揺らいだ。ここでつて…？

「…で…？どうしたんですか？」

私は気になつて訊いた。

「おじいちゃんから誰にも言うなと言われました。…でも、何だか嫌な予感がしてならないので話します…」

ソールさんとロルフさんは言い争いをやめて、ラシエさんの方へ向いた。

「おじいちゃん。数年前、ティダの村で生活していたんです…」

私は何かを感じるように頭が揺れるような感覚を感じた。

「数年前に？数少ない生き残りだつたのですか?!」

ソールさんが困惑しながら訊いた。

「はい…。何十年も前、ティダの村が崩壊しかけた時。おじいちゃんはある女の人の事を好きになつていていたようです。一緒に脱出しようと思い、彼女の事を探したみたいで、結局その人は見つからなかつたみたいです…でも最近ある手紙を見て、ここに来る事を決心したみたいなんです」

ある手紙…。

「それって…」

私はボロボロの手紙をラシエさんに見せた。

「…そう。きつとこれ…です」

ハナ・コールさんが手紙を覗くように見ていた。

「ねえ。これ、おかしらの字じゃないの？」

「…そうだ。おかしらの字だ！」

ダ・イースさんとハナ・コールさんが言つた。

困惑していたが、この字はティパさんでの間違いないらしい。

「やっぱりおかしらはクラヴァットだつたんだね。前からおかしいと

は思つていたんだ…セルキーっぽくもない人だつたから」

…。

2人きりでここに来た。そして瘴氣の中の村にいる。2人はティダの村の生存者。

2人の因果を結ぶのはあの手紙。

私はここで嫌な予感がし、ム・ジカの持つていたゲージを奪つてティダの村にまで走つて行つた。

「!? エリン！どこに行くんだ！」

ム・ジカがあっけにとられながら、私に言った。

「手紙を見せたのは私のせいよ…だから、私にも責任があるの！何だか嫌な予感がする…ごめんなさい！」

ソールさんを払いのけて私はティダの村まで行つた。

「お、おい！」

「エリン！待つて」

「すみません！ここで待つていてもらえませんか？」

「お、おい！君達！」

ム・ジカ、クレア、シーベークは私の後を追いかけるようについてきてくれた。

私は申し訳なくなつて、振り向き謝つた。

「みんな…ごめん…」

「良いよ。別に」

ム・ジカが言つた。

「それよりもさ。早く行こう？」

クレアは私の泣きそうな顔を見ながら、優しく言つた。

「ここに何事もなければ、それで良いんですけどね…」

シーベークはあたりを見回すと、不安そうに言つた。

私の嫌な予感は…あたつてしまつたのだつた…。

### 第3話 「まあたらしい手紙」

「相変わらず、嫌なところだな…」

ム・ジカはティダの村の至るところにある蜘蛛の巣を見ながら言った。

ここは昔、クリスタルキャラバンが帰還せず。

クリスタルの輝きも失い、住人はそのまま屍となってしまった村。手入れはされていないのも当然だが、来る者を嫌な気分にさせるのも変わらないところだつた。

「本当にセシルさんと、ティパさんがいるのかな？」

クレアは首を傾げながら言つた。

「…やはり見間違いでしょ？　ここに来れるなんてありえないです」

シーベークは「そうに違いない」と否定していた。

シーベークも嫌な予感がしており、それを否定したいからこそ、そんな事を言つてる。

私はそう思つていた。

「…にいられないならそれでいいの…いらないなら…」

私はあの手紙のせいだと、手紙を見せた私のせいだと、ずっと思つていた。

ティダの村のあらゆる場所を探した。

モンスターがいつも以上に出現しており、探索するのが不可能に近い状態似も感じた。

誰かが私達が行くのを阻んでいるようにも感じた。

「…やっぱり、誰もいねえな」

ム・ジカはゲージを持ちながら、辺りを見ながら言つた。

「…にいたら、すぐにわかるもんね。エリン。きっと氣のせいだよ。ラシェさん達にもそう言おう」

クレアは暗い顔をした私を慰めるように言つてくれた。

しかし、私にはどうしてか。不安が消えなかつた。

「シーベーク。やつぱりただの噂だつたのかな。でもラシェさんが

言つたから、私は2人が生存者だつて事は嘘じやないと思うんだ…」

私はシーベークなら否定してくれるだろうと思つて訊いてみた。

…?しかし、シーベークはなぜか、ティダの村の中央広場に生えてる木を見つめていた。

「シーベーク?」

「おい? シーベーク!」

クレアとム・ジカも気になつて、シーベークに訊いた。

シーベークはやはり木を見つめていた。

「…帰りましよう…」

「は?」

突然暗い声になつたシーベークを不思議に思つたム・ジカが言った。

「帰りましようと言つたんです…やはりいなかつたみたいですよ、ここには」

「なんでよ? シーベークらしくないよ? 確証もないのにそんな事言うなんて」

クレアはシーベークらしくない発言に疑問を思つていた。  
「シーベーク…さつきからなんで木なんて…」

「ダメです! 見てはー」

シーベークが止めようとした瞬間。

私は見つけた…2人の…セシルさんとティパさんの…。

「…」

私は木の近くまで走つた。

ム・ジカ達もすぐに私の後を追つてくるかのようについてきた。

シーベークは顔をうつむいたまま、ついてきた。

ティダの村の中央広場にある不思議な木。

私はこの木の近くでボロボロの手紙を拾つたんだ。

「…」

木の近くには2つの遺体があつた。

もう息がない…当然だ。瘴気に冒されて生きられる人なんていな  
いからだ…。

「おい…」

「…………うそ……」

クレアは泣きそうな顔で困惑していた。

「…エリン。貴方のせいじやないですよ…これは貴方のせいじやない」

「…私のせいだよ…こんなのは！私のせいだ！」

私はその遺体に泣きじやくつた。

もう息をしていない。

いつもお茶目でスケベだつたセシルさんと、陽気な笑顔を見せてくれたティパさんを、いつまでもゆすつていた。

これは夢だ。そう思いながら…。

「ごめんなさい…！」

私はいつまでも泣いていた。

皆が言葉が聞こえても、取り返しがつかない事をしてしまつた事を、いつまでも嘆いていた。

「…手紙ですね、これ」

シーベークは泣いてる私を起こしながら、セシルさんが握っていた手紙を見た。

「…」

「なんだつて…？」

ム・ジカは私を支えながら、シーベークに訊いた。

『私たちは、ながいときをえて、ついにいつしょになります

もう、だれにもじやまされることなく、えいえんに…』

シーベークが手紙を読み終えた。

私は目の前が真っ暗になつた…何も嘘だと思うように…。

## 最終話 「えいえん」

今年ももう終わりだ。

ティパの村は私達が帰つてきた事で、いつもの宴の準備をしていた。

ゲージは一杯で、今年も無事帰つてこれた。  
何も悲しい事はない。何も心配する事もない。楽しい時間の始まりだ。

でも私の心は、いつまでも晴れなかつた…。

ティダの村からセシルさんとティパさんの遺体を見つけたその後。ソールさん達がいつまでも帰つてこない私達を心配しに来た。ティダの村から遺体を運び出すと、ラシエさんは泣いていた。ハナ・コールさんとダ・イースさん達も泣いていた。

ラシエさんは「おじいちゃん」と何度も呼びかけ、ハナさん達は「おかしら」と何度も呼びかけ。

いつまでも返事をしない2人に呼びかけていた。

「あとの事は私達に任せておいてくれ」

ソールさんとロルフさんがそう言い残し、私達はティパの村へと帰つてきた。

ティパの村での宴をする準備の最中。

「エリン。この手紙を」

とシーベークが私の家にやつってきた。

「これは？」

「ラシエさんからです」

ラシエさんからの恨みの手紙だろうか。

私は不安になりながら開けてみた。

『エリンさん、お元気ですか？

おじいちゃんの事、どうか自分だけを責めないでください。

おじいちゃんが残してくれた多くの思い出はなくなりません。

そして、おじいちゃんとティパさん。

2人の想いも永遠に消える事がなく、ようやく巡り会えた事。

本当にありがとうございました…エリンさんのおかげで、おじいちゃんはもう一度。

自分の好きだった人とめぐりあえたんです。

ありがとうございました…。おじいちゃんも後悔してないと思いません…。

だから自分が責めないで。本当にありがとうございました！」

手紙には何度も滲んだ後があった。

「…」んなのするいよ

「でも貴方の持つてきた手紙。あれのおかげでまた巡り会えた。とっても素敵な事だと思いますよ…」

私はシーベークの持つてきた手紙を何度も読み、何度も泣いていた。

ただただ後悔しか残っていない私は、いつまでも自分の行いを責めた。

「きっとこれで良かつたんですよ…。きっと誰だつて、わからない今まで終わるのは嫌なはずです。巡り会えた事こそ、素晴らしい事ですよ…」

シーベークは何度も励ましてくれた。

私は泣きながら、頷くだけだった。

今年ももう終わる…。またクリスタルキヤラバンの旅へと旅立つんだ…。

ミルラの事をあげる宴の中。

ム・ジカ、クレア、シーベーク達は私を励ますように、何かを言おうとしていた。

「大丈夫だよ。もう大丈夫」

「お、おう。そうか」

突然私が笑顔になつたのが驚いたのか。ム・ジカは少々冷や汗をたらしながら言つた。

「エリン。その後ラシエさん以外にも、ハナ・コールさんの手紙も來たんです。おかしらの最期のお願いを叶いてくれてありがとうございます」と

「え、それだけ？」

なんともハナさんらしい手紙だつた。

私はぶつと吹き出してしまつた。

「誰もが皆、永遠をわかちあえるわけじゃない。最後の最後に出会えたのは、彼らにとつても良い事だつたはずです」

「うん…大丈夫。もうわかつて いるから…」

シーベークの説教じみた言葉を深く考え、私はまた泣き出しそうだつた。

「ね。エリン。セシルさん達やつぱりティダの村の生存者だつたらしいの」

「う、うん？」

クレアが言つた。

「その日、彼らは結婚しようとしていたらしいの。でも、願いは叶える事が出来なかつた…。クリスタルキヤラバンが帰還出来なかつたからよ」

「…」

「もしこのまま、本当の事を知らずに、あの手紙の事をわからないまま。過ごしていた方が良かつたと思う？」

始まりはある手紙だ。私はあの手紙を拾わなければと思つていた。でも、今は思わなかつた。

「いいや…思わない。何となくわかつたの。これで良かつたんだろうなつて…ラシエさん達も言つていたからさ」

私は泣きそうな目をこすりながら、クレアに言つた。

「そ。きつとこれで良かつたんだよ。永遠に邪魔される事なく、ようやく結ばれたんだからね」

クレアはまた肩をポンポンと叩きながら励ましてくれた。

あの手紙がなかつたら永遠に知らずにいた事実。それはほつておけば良かつたのだろうか。

「いや。知らせて いた方が良いと思う。

2人の気持ちが永遠にわからぬままにしてはいけないとと思う。何だかそんな事を私は思つていた…。

「ま、まあ、元気になつてよかつた。それよりも、来年も行くだろ！ク

リスター・キラバーンの旅！」

「全くアンタは…空気読めよ」

なんだと！とム・ジカはムキになつたように怒りながら答えた。

今年ももう終わり、また新しい旅が始まる…。

また皆と旅が出来るのだろうか。

皆と暮らせられるのだろうか。

そんな事を思いながら私は、星空を見ていた。

きっとティダの村の宴もこうだつたに違いないと思つた。

「来年も、皆と一緒に、これからも一緒に旅できると良いね！」

皆にはちょっとだけ笑われたが、それでも私はそう思つた。

新しい旅に向けて、また旅立つのだつた。